慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蔵内数太の生涯と教育社会学
Sub Title	Kazuta Kurauchi's educational sociology and his life history
Author	竹村, 英樹(Takemura, Hideki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.1 (2017. 1) ,p.175- 204
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	有末賢教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蔵内数太の生涯と教育社会学

竹村英樹

はじめに
1．先行研究の蔵内評価――辞典の項目に着目して――
2．蔵内の生涯と社会学
(1) 岡山時代（生年から六高卒業まで：一八九六～一九一七年）
(2) 東京帝国大学時代（上京から卒業そして大学院まで：一九一七～一九二三年頃）
(3) 文部省・私大講師時代（文部省勤務から九大赴任まで：一九二三年頃～一九三三年）
(4) 九州帝国大学時代（赴任から退職まで：一九三三～一九四六年）
(5) 大阪大学時代（着任から定年退職まで：一九四八～一九六〇年）
(6) 関西学院大学・追手門学院大学時代（一九六〇～一九七三年）
(7) 大学退職以後（一九七四～一九八八年）
3．蔵内の教育社会学
おわりに

はじめに

蔵内数太（一八九六－一九八八）は不思議な魅力をもつ社会学者である。そして、息の長い社会学者でもあった。九一歳の長寿をまっとうし、晩年まで著作を続けた。没後にも『備中江原図解説』（蔵内寿子と共著、一九八九年）が出版されている。東京帝国大学文学部社会学科の卒業論文「社会衰頽の原因考察」（一九二〇年）から約七〇年間にわたり学術的著作が執筆されている。蔵内は没後、日本社会学会の学会誌『社会学評論』四〇（四）（一九九〇年）で特集が組まれるほど、重要な社会学者である。

その業績は『蔵内数太著作集』全五巻にまとめられている。蔵内は主要な内容から巻題を次のように付けている。第一巻「社会学一般」（一九七八年）、第二巻「文化社会学」（一九七七年）、第三巻「教育社会学」（一九七六年）、第四巻「社会学論文集」（一九七九年）、第五巻「日本文化の社会学」（一九八四年）の五つである。一見すると社会学（理論社会学）、文化社会学、教育社会学の三つの領域が蔵内の守備範囲であるように思える。現代の社会学者は個別の領域社会学（連辞符社会学）が成立した体制を前提に蔵内の業績を見て、三つの領域を専門とした社会学者と判断してしまう。しかし、日本社会学史において個別領域社会学が成立し展開する過程とともに生きた蔵内の生涯とその研究を見るとなると、一つの苗から大きく枝を伸ばし、葉を茂らせた結果として、蔵内の業績を見るべきであろう。

さて、本論文では社会学者蔵内数太がその生涯において教育社会学をどのように展開したのかを明らかにする。日本の教育社会学史において蔵内が忘れ去られようとしていると筆者は考えている。その様相を1節で複数の社会学辞典と教育社会学辞典において蔵内がどのように記述されているかによって確認する。2節で蔵内の生涯をたどる。3節では蔵内社会学の中で彼の教育社会学研究がどこに位置するのか確認する。おわりに現代の教育社

会学においてなぜ蔵内に注目するのか述べ、日本の教育社会学史における蔵内数太の再評価を行う。

1. 先行研究の蔵内評価——辞典の項目に着目して——

蔵内数太は社会学辞典[1]の項目等でどのように記述されているだろうか。一九九三年有斐閣『新社会学辞典』、一九八八年弘文堂『社会学事典』、一九八六年東洋館出版社『新教育社会学辞典』、一九六七年東洋館出版社『教育社会学辞典』、一九五八年有斐閣『社会学辞典』、一九四四年新明正道編著『社会学辞典』（河出書房）を見ると、奇妙なねじれを発見できる。四冊の社会学辞典（以下、辞典と事典を総称して辞典と記す）と二冊の教育社会学辞典の記述のちがいである。社会学辞典ではすべてに人名項目として掲載されており、「教育社会学の開拓者」（光吉 一九九三年、有斐閣）、「社会学の理論的・体系的研究者。また教育社会学の創始的存在」（一九八八年、弘文堂）、「早くより、わが国における教育社会学の開拓者となった……」（一九五八年、有斐閣）、「氏は教育現象に関心を有ち、昭和八年『教育と社会学』を出している……」（一九四四年、新明編著）と学歴職歴の後に続く内容の筆頭に教育社会学者であることを記述している。教育社会学辞典には人名項目の掲載方針として日本人については故人のみを掲載しているので掲載されていない。それでは、蔵内は教育社会学辞典ではどのような項目に登場するのか。

まず、一九六七年東洋館出版社版では、項目は「教育社会学史」（馬場、一九六七）、「田制佐重」、「理論社会学」の三つに登場する。「教育社会学史」は大項目であり、その下位項目〔わが国における教育社会学の発展〕において、「……そして昭和初期になると、綿貫哲雄、蔵内数太、岩井竜海等の社会学者が、文化社会学の一環としての教育社会学の問題をとりあげ、……」と書かれている。この教育社会学辞典では蔵内は「社会学者」で

あり、教育社会学者ではない。綿貫と岩井と一緒に「昭和初期の文化社会学の一環としての教育社会学」というまとめ方もいささか大雑把である。この後の記述で「しかし、教育社会学が市民権を獲得するのは、第二次大戦後で」と述べ、日本の教育社会学史における戦後と戦前との断絶が表現されている。学史として積極的に位置づける意図はないように読める。次に、項目「田制佐重」では、「蔵内数太とともに、わが国教育社会学の揺らん期に貢献した学者。」と書き始め「蔵内が文化社会学の立場から教育に接近したのに対し、田制は……」とつづけ、田制の項目でありながら、半分が蔵内の紹介となっている。田制の項目に蔵内を忍ばせて入れたという解釈もできるが、記述は右で引用した箇所のみにしかなく情報量は少ない。蔵内は教育社会学史に正統に位置づけられているとはいえない。三番目の項目「理論社会学」では、『社会学』（一九六二、培風館）を参考文献として掲載し、「……わが国では蔵内数太が集団社会学、文化社会学、歴史社会学と並んで理論社会学の部門を設けているが、それは社会的結合の本質とその諸形式、集団の諸形態、社会的過程、社会的結合と文化との一般的関係などを取り扱い、社会学的諸認識の整合的体系化に寄与しようとするものである」と比較的内容に立ち入った記述がなされている。

次に一九八六年東洋館出版社版では、項目ばかりか、索引にも登場しない。管見の限りだが、項目「教育社会学史」（麻生、一九八六）の中で蔵内数太・綿貫哲雄の『教育社会学』（一九二七、山海堂）が一九二〇年代に「アメリカ以外のヨーロッパや日本において『教育社会学』と冠する著作や論文が相次いで刊行されている」文献の一つとして記載されているだけである。次に見る一九六七年版の記述も決して扱いが大きいとはいえないが、一九八六年において蔵内はほとんど忘れ去られているといってよい扱いである。もちろん、社会学辞典でも人名項目「蔵内数太」の主たる内容は現象学的方法に基づく社会学理論の体系化と文化社会学の展開（光吉、一九九三）の記述に多くが割かれている。

教育社会学辞典では理論社会学者として扱われ、社会学辞典では教育社会学の開拓者・創始者としてまず紹介されている。このねじれは教育社会学辞典の著者が教育社会学を戦後にスタートした学問分野として捉えているために生じている。また、教育社会学の視線が戦前を向いておらず、現在に集中しているからであろう。教育社会学辞典以外でも、日本教育社会学会二〇周年記念の学会事業として刊行された『教育社会学の基本問題』（一九七三年）に収録されている「日本教育社会学史」および「日本教育社会学史年表」では、学史の記述は日本教育社会学会発足前後以降、戦後に限定されている。参考文献においても『文化と教育』（蔵内、一九四八＝著作集三：三八五－五二九）が掲載されているだけである。

このように教育社会学辞典では蔵内数太が教育社会学者として位置づけられていない中、本格的に教育社会学史の中に蔵内が位置づけられる論稿が出るのは、くしくも『新教育社会学辞典』と同じ一九八六年に出版された『リーディングス 日本の社会学 16 教育』（東京大学出版会）においてである。柴野昌山は昭和戦前期における蔵内の教育社会学を教育社会学史の助走期における仕事と捉えている。しかし、教育社会学が新制大学の中に制度として発足して発展した戦後の発展期と戦前の助走期の間に「断絶」が存在すると述べている（柴野、一九八六a：五－六）。教育社会学史における戦前戦後の学史的断絶にもかかわらず、本節で見たように蔵内は教育社会学を戦前戦後と継続して論じている。この矛盾をどう考えれば良いのだろうか。この点は3節で検討する。

2．蔵内の生涯と社会学(2)

蔵内の生涯を研究テーマと職歴という観点で概観するとき、七つの時期区分ができる。ここでは視野を広げて研究歴を中心に見つつも、人的な交流や教育（講義担当）、学会活動など蔵内の生涯をたどっていく。この作業

は3節で蔵内社会学の中で教育社会学研究がどのように位置づけられるのかを検討する。時期区分は次の七つである。(1)岡山時代（生年から第六高等学校卒業まで）、(2)東京帝国大学時代、(3)文部省・私大講師時代、(4)九州帝国大学時代、(5)大阪大学時代、(6)関西学院大学・追手門学院大学時代、(7)大学退職以後、である（本論文末に掲げる「蔵内数太年図」を参照）。

(1) 岡山時代（生年から六高卒業まで：一八九六〜一九一七年）

蔵内は、一八九六年八月一日、岡山県後月郡西江原村（現井原市西江原町）に、父静三郎（一八六三〜一九四七年）、母与志遠（一八六六〜一九五七年）の第三子（姉が二人）として出生した。静三郎（号 守軒）は漢学塾興譲館の出身であり、第二代館長阪田警軒（一八五三〜一八九九年）のもとで塾頭を務めた。「警軒は私の間接の恩師」（著作集五：五〇四）と述べているが、父静三郎を通して、興譲館の文化的影響下で、蔵内の漢学の素養は培われたと思われる。私立興譲館中学校を経て、一九一四年九月第六高等学校（岡山市）に入学。一九一七年七月一〇日に第六高等学校大学予科第一部丙類を修了し、東京帝国大学文科大学哲学科（社会学専修）に入学した。六高で所属した第一部丙類は法律科・政治科・文科に進学する者でドイツ語を主として学ぶクラスである。担任は独文学者の雪山俊夫教授（一八八〇〜一九四〇年）であった。ドイツ語の習得が蔵内のドイツ社会学への傾倒の基礎となったことは疑いない。

蔵内は幼少時代（備中江原時代）のことをほとんど書き残していない。六車進子（一九九一）は「蔵内に社会学を志ざさせたと繰り返し熱っぽく語っていた」エピソードとして「中学の頃みた、旭川沿いの料亭から嘲笑をこめて投下される残飯を川原で必死に拾い口にしていた一家族の姿」であったと書き残している。六車は旭川のエピソードと並べて「上京した大正十年前後の社会・文化の激動」を「蔵内社会学が現前化してくる沸騰した現

場」と評し、「速成の近代化の中、共同体が大きく変容していくとき」に居合わせたことが蔵内社会学の原点であると解釈している。[3] 蔵内は日本社会の大きな変動の中に人生を送った。六車は、蔵内理論の核は「個の生と死を幾重にも超えて悠久に流れる巨視的時間において永遠に存続している共同体という観念―命」の問題であると指摘する。しかし「蔵内の共同体に血と土の匂いはない」ともいう。「晩年、蔵内は澄明化された共同体に還っていく」との指摘は示唆的である。蔵内の共同体観は生まれ故郷である備中江原での体験が強く規定していると思われる。

米村昭二（一九九〇ａ）は、蔵内の「全体社会の概念は、諸結合の複合、地域的範囲、生活の自足性という三つの要因に規定されて」おり、全体社会論の先行理論である高田保馬のそれと比して、「高田の場合、社会的結合の稠密な集中が全体社会という一つの空間的範囲を定めるのに対し、蔵内では、結合の稠密な集中が空間性に基づいている」点が「蔵内の全体社会の大きな特徴」と指摘する。高田の全体社会論は、成員のすべて、すべての結合、自足的範囲の三つの要因から規定されるのに対して蔵内では「すべての成員」がなく、逆に地域的範囲が一構成要因として加えられている（米村、一九九〇ａ：三七九）。

ここでは蔵内の全体社会論を詳しく論じないが、人が「地域的範囲」をどのように体験するのかは、没後に刊行される『備中江原図解説』[4]の記述に見ることができる。「備中江原図」は現在でいう岡山県西端の井原市の一部にある山陽街道と小田川を鳥瞰して描いた幕末の実景図で、その舞台は蔵内の生まれ故郷である。解説ではたとえば母校である興譲館の創立の経緯と校名「興譲」の由来、初代督学として招聘された儒学者阪谷朗廬の来歴が述べられ、そして、朗廬を訪ねてきた高名な学者や文人や志士が書き残した文をたどりながら、人と思想がこの地でどのように交流したか、その意味的世界が備中江原という地域的範囲を舞台に述べられる。その人物たちの体験と思想は共同体的精神と地域的範囲をつなぐものとして位置づいている。蔵内が故郷備中江原をどのよう

なまなざしで眺めていたかは直接的なエピソードから証拠を示すことはできないが、『備中江原図解説』は実存的追求の深さの現れとして読むことができる。それは蔵内が考える共同体の出発点でもあり、到達点であるように思われる。

(2) 東京帝国大学時代（上京から卒業そして大学院まで：一九一七〜一九二三年頃）

さて、蔵内が上京して、東京帝国大学に入学し社会学を専攻することを決めたときの回顧がある。「高等学校三年生の時大学で社会学を専攻することにきめたが、クラスの中でたったひとり文学部へ、それも社会学科へというのは、周囲の人からは当時物ずきにも見られた。…〈中略〉…その頃私が社会学という学問にもっていたイメージは、芸術とか思想とかといったものを『社会』的背景に相対化するということに関して、何か方法をもっている学問という程度であった」[5]（著作集五：四五五）という。

ここで述べられた社会学を専攻とする選択の動機と旭川のエピソードはどのようにつながるのであろうか。蔵内は大学への進学に際して、当初から社会学の研究者になろうと思っていた節がある[6]。父蔵内守軒（静三郎）と守軒の師である阪田警軒の系譜に位置し、熊沢蕃山に傾倒する蔵内は学者を人生のロールモデルにしていたのではないか。そして「長い歴史の間に反復伝えられて来た人間の洞察」（著作集四：九八）の系譜を近代社会における（理論）社会学に求めようとしたのではないだろうか。旭川のエピソードからは社会問題を探求する学問としての社会学が直接的に導かれやすい。そのような側面もあったにちがいない。しかし、川原で投げられた残飯を口にする家族が逆照射することで見えてくる社会を捉える方法をこれから学ぶ社会学に予感したのではないだろうか。

そうであるならば、蔵内は建部遯吾のもとで社会学の特質と方法をつかもうと懸命に学ぼうとしたはずである。

建部の社会学は壮大な綜合的社会学体系であったことはよく知られている。「これには当時の若い世代には通じがたい面」があったが、また「社会学研究者の視野の拡大を促した面」もあった（蔵内、一九八五：二一七）と評価するように、蔵内は「（建部）先生の説に対する意識した反逆者であったわけではない」。しかし、蔵内は「社会学の学問的特質についてそれがどこにあるのか分からず、充たされないものを感じていた」（著作集四：九三）。そうした中、高田保馬と出会い、高田の大著『社会学原理』（一九一九）を通読して蔵内は「急に眼界が開けた感じがした」という。高田から刺激を受け、卒業後は「社会の社会的なるものは何か、社会学の社会学的なるものは何かを知ること」が蔵内の一貫した課題となった。

一九二〇年に書かれた卒業論文の題目は「社会衰頽の原因考察」であった。その一部は「人口減衰と社会の衰頽」（一九二一）（著作集一：四一三－四二五）として活字になっている。高田の著作に導かれながらも、蔵内は卒業後もしばらく建部の影響下にあり、卒業後に在籍した大学院でのテーマは「社会問題と国運の関係」であり、これにも建部の影響が見てとれる。

(3) 文部省・私大講師時代（文部省勤務から九大赴任まで：一九二三年頃～一九三三年）

建部の壮大な社会学に不満を感じて、当初は秋葉隆、田辺寿利とタルドやジンメルの輪読会をもっていたが、時は第一次大戦後、ドイツ社会学の「英雄時代」にあたり、「現象学的社会学や文化的・知識社会学の書物に取り憑かれ」た（著作集五：四五六）。第一次大戦後の社会学界の空気――すなわち、一九二二年の建部の辞職、ドイツ社会学の輸入、一般社会の「社会」に対する関心の高まり――は、東京帝国大学社会学研究室に出入りする社会学徒たちに自然と新しい動きを促した。先の輪読会は拡大発展し、一九二四年七月に「東京社会学研究会」が発会した。この「ささやかな研究会」には、松本潤一郎、秋葉隆、鈴木栄太郎、本田喜代治、喜多野清一らが

参会していた（著作集五：四四九－四五三）。

一九二〇年七月に大学卒業後、同年八月から文部省嘱託に就任、教育関係の調査研究に従事しつつ、法政大学、日本大学等で講師として社会学を講じた。文部省時代には、実業補習学校の公民教育教授要綱の内容に社会学の知識を盛り込んだ綿貫哲雄との仕事（蔵内、一九二五年六、一〇月＝著作集三：三－四六、四七－七七）や、同じく綿貫との共著（一九二六年＝著作集三：八七－二二二）が蔵内の教育社会学研究の端緒となっている。また、非常勤講師として担当した授業の中には、教育社会学を内容とするものがある。法政大学において、一九二九年「社会学特殊研究（社会学の諸問題とくに教育社会学的問題）」、一九三二年「社会学特殊研究（教育社会学）」を担当している。(7)

(4) 九州帝国大学時代（赴任から退職まで：一九三三～一九四六年）

一九三三年一一月九州帝国大学法文学部助教授に就任し、一九三五年一一月教授に昇任した。九大における講義は文化社会学を中心に、演習ではM・シェーラー、T・ガイガー、A・F・フィアカントの原著を講読している。教育社会学に関する内容は確認できない。九州帝国大学赴任の前後からは「蔵内にとって正にプロダクティブな時期」であった。この時期相次いで発表された論文は、戦前戦中期までの研究の集大成として、一九四三年出版の『文化社会学』に結実する。とくに、論文「個人と社会」（一九三五年七月）は「現象学的社会学者」としての蔵内（社会学）を方向づけた画期的な論文である（米村、一九九一）。この論文において、社会の本質は意識体験のうちに直接与えられる我と汝との「視界の相互性」にあるとしたリット（Theodor Litt）の説を採用し、以後、この説を礎として自身の社会学の体系化を進めた。蔵内の社会学の特徴は、その理論展開に際して東洋思想や日本文化の伝統を考慮している点にある。

九州帝国大学赴任前後は教育社会学の論文を多数執筆している。また、文部省から視学委員を嘱託され福岡県内の中等学校に公民科授業の視察のため訪れている。教育社会学関係の仕事は一九三〇年代末まで続くが、一九四〇年頃から日本の思想伝統に関する考説・論稿が増えてくる。この時期から日本精神文化の研究を主眼とする民間の研究所である斯道文庫にかかわるようになる。一九三九年一一月に福岡市に設立された斯道文庫は地元の九州帝国大学関係者の協力を得て活動を進めていく。蔵内は一九四〇年一月相談役、一九四一年三月顧問、一九四四年六月に理事（〜一九四五年一二月）に就任している。この間、機関誌『斯道文庫報』への寄稿や文庫主催の夏期講座講師など、文庫の研究活動に参画している。東洋思想および日本思想についての造詣と関心はこの時期から論稿となっていく。論語と社会学、易の社会学、連句の社会学的考察は『文化社会学』（蔵内、一九四三＝著作集二：三−二九九）に収録されている。

一九四六年三月に九州帝国大学教授を退官する。一九四八年九月に大阪大学に法文学部が新設された社会学講座に初代教授として着任するまでは二年半の空白期間となる。この退職は『九州大学五十年史・学術史・下巻』（一九六七：二一三）には「九大思想審議会の示唆による」「自発的退官」とある。退官の事情は詳らかではない。[8] この間、蔵内は一九四七年一〇月二三日には「文化社会学」により東京大学から文学博士の学位を受けている。戦後最初の単著『文化と教育』（一九四八年一月）もこの間の仕事である。森東吾（一九八八）は『社会学評論』に追悼文を寄せ、蔵内が一九四七年晩秋に詠んだ一首「波騒ぐ浦に　一羽の鷗飛ぶ　わが物思ひの影のごと飛ぶ」を紹介している。

(5) 大阪大学時代（着任から定年退職まで：一九四八〜一九六〇年）

一九四八年九月に大阪大学に法文学部が新設されると、蔵内は社会学講座の初代教授として着任した（一〇月

二五日の開講とともに講師、教授任命は一一月二六日）。講義は「社会学通論（普通講義）」を担当している。一九五〇年には阪大に社会学第二講座（経験社会学）が設置され、小山隆が着任している。大阪大学勤務の時期（～一九六〇年四月）において、蔵内は学内外で精力的に活動をしている。学会活動では日本社会学会理事（一九五〇年一〇月～六〇年一〇月）、同会長（一九五八年一〇月～六〇年一〇月）、関西社会学会代表（のち委員長）（一九五六年五月～五九年五月）と社会学会を牽引するポジションに就き、第二回国際社会学会議（一九五三年八月、於リェージュ）に出席している。また学内では大阪大学文学部長（一九五四年四月～五九年三月）を務めている。また、戦後発足した日本教育社会学会の理事にも一九五〇年一一月に就き（～一九六九年一〇月）、再び教育社会学の論文を出すようになる。だが、この時期から蔵内の中心的な仕事は自身の社会学体系の構築へとシフトする。その最初の成果は『社会学概論』（一九五三年）として結実する。

(6) 関西学院大学・追手門学院大学時代（一九六〇～一九七三年）

大阪大学退職後、一九六〇年四月に関西学院大学社会学部の設置とともに教授就任、新設された社会学部の「リーダーとして」迎えられた（高坂、一九九五）。その後、一九六七年四月に追手門学院大学文学部教授（～一九七四年三月）を務めている。この時期の中心的仕事は『社会学概論』（一九五三年）の改訂増補であり、『社会学』（一九六二年）、『社会学（増補版）』（一九六六年）と着実に体系化を進めていく。

蔵内の社会学は、社会学論および社会学の対象論に大きく分かれる。社会学論は史論と方法論に分かれており、社会学の発生と発達を考察した「史論」では、日本の社会学史において「西洋社会学の移植は……永い思惟の伝統をもつ文化的土壌に行なわれた」と観る。この点に蔵内の特徴がある。また、社会学が扱う領域を、集団社会学、文化社会学、理論社会学、歴史社会学の四部門に分け、研究方法論に関しては、単一の方法への固着を戒め、

現象学的方法、精神科学・理解的方法、自然科学的方法の三つを挙げている。一九六二年版以降三つの方法のうち現象学的方法が全体の方法的基礎になる。蔵内は社会学の対象である社会を三つのレベル――関係、集団、全体社会――に分けた。また、社会本質論において、リットの「視界の相互性」の他我認識の曖昧性を克服する「自覚の後至性」の体験論を展開した。蔵内の理論的関心は、全体社会とその社会変動にある。全体社会の構成を分析するための〈法則（理）・運命（命）・規範（法）・潮流（勢）〉の四つの観点、社会学的時間論の展開と社会変動の因子としての〈前集団、役割集団、後集団〉の区別は、蔵内社会学の特徴である。そして「本書は日本で最初の体系的な現象学的社会学の本とみなされるようになった」（富永、二〇〇四：三八一）。『社会学（増補版）』（一九六六年）（著作集一：一－三三二）は「蔵内社会学」の到達点である。

(7) 大学退職以後（一九七四～一九八八年）

七〇年代半ばから『蔵内数太著作集』全五巻（一九七六～八四年）の編集出版に着手し、それと並行して、易の社会学的研究や中山みきの思想に関する研究など、晩年は、日本の文化史を異文化接触の諸相という観点から探求した。これらの論文は「日本文化の社会学」と題される『著作集第五巻』（一九八四年）に収録されている。大阪大学時代からかかわってきた適塾記念会や懐徳堂記念会の会報に書かれた諸論稿も同巻に収められている。また、後学の社会学者から求められて、富永健一著『社会学原理』（一九八六）の書評や領家穣とのダイアログ（領家 一九八五、蔵内：一九八五）を行っており、最晩年まで現役で研究活動を継続した。

一九八八（昭和六三）年七月六日、自宅において高血圧性心疾患のため逝去。享年九一歳であった。

3．蔵内の教育社会学

これまで見てきたように、蔵内は研究の初期から教育社会学の論文を執筆している。戦前期から戦後期まで、前節の時代区分によれば、(3)文部省・私大講師時代、(4)九州帝国大学時代の前半、そして、(5)大阪大学時代まで、著書や論文が書かれている。本節では主な業績である六つの論稿を取り上げ、内容を確認していく。一九二六年は最初期の、そして、五三年は最後の教育社会学論文である。これらの間に書かれた単著二冊に所収された論稿と新明正道（一九四四：七八六）が社会学辞典において言及した岩波雑誌『教育』に載っている論文を加え、戦前戦中戦後における蔵内の教育社会学の内容を確認していく。

一九二六年「社会学と教育」綿貫哲雄と共著「社会学」（師範教育研究会編『師範大学講座』山海堂出版部）第二編（『著作集三』に収録）

一九三三年「教育と社会学」『教育』18、岩波書店

一九四三年「教育社会学の問題」『文化社会学』培風館（『著作集二』に収録）

一九四八年『文化と教育』丁子屋書店（『著作集三』に収録）

一九四九年／一九五四年「教育と社会」田辺寿利編『社会学体系第14巻・教育』（国立書院）石泉社（『著作集三』に収録）

一九五三年「教育社会学の領域と課題」『講座教育社会学第1巻・近代国家と教育』東洋館出版社（『著作集三』に収録）

一九二六年「社会学と教育」は二つの版があり、その内容は同じである。初出は『師範大学講座』（一九二六

年）に収録された「社会学」と題する論文で綿貫哲雄と共著である。この「社会学」の中身は綿貫が執筆した「第一部 教育の基礎としての社会学」と蔵内が著した「第二部 社会学と教育」で構成されており、ここで対象とするのは第二部である。さて、『師範大学講座』は一四〇〇ページの大著で八つの科目（章）からなっている。このうちの一つが「社会学」である。さらに翌一九二七年に各科目別に分割製本したものが『教育的社会学』（綿貫哲雄と共著）として頒布されている。分割製本の際に「社会学」が『教育的社会学』と改題されて、表紙と奥付がつけられて世に出されているが、「単行書として出版したものにあらざること」（同書奥付）と付記されている。本論文では初出の一九二六年版の書誌情報を優先する。

さて、一九二六年「社会学と教育」は社会学説史と教育社会学説から構成されていて、六章立てのうち、一〜五章は社会学説で、最終章の六章が「教育の社会学」であり割合も全一五五ページ中三五ページに過ぎない。本書が一九二六年版で『社会学』と題されていることもある意味で納得がいく。社会学説はコント、スペンサー、タルド、ジンメル、ウェーバー、テンニェス、フィアカントが取り上げられる。教育社会学ではデュルケーム、ミュラー・リヤー、フォン・ヴィーゼの三人が扱われているが、学説研究にとどまり、体系的な記述には至っていない。

一九三三年「教育と社会学」は、岩波の雑誌『教育』に掲載していることから、教育を専門とする読み手を想定している。事実学である「教育の社会学」と規範的問題に立ち入る社会学的教育学思想の二つを「極めて概略に記述」したもので、両方ともに学説と学者の紹介にとどまっている。「教育の社会学」の箇所ではウォードが登場しているが、アメリカの教育社会学は扱われていない。アメリカ教育社会学の紹介者として田制佐重の名前が言及されるのみであり、あくまでもドイツの文献を中心にしている。前掲書で扱ったデュルケーム、ミュラー・リヤー、フォン・ヴィーゼに加えて、テオドール・ガイガー（Theodor Geiger）を取り上げている。一九

三〇年のガイガーの論文「社会学の対象としての教育」に言及しており、最新動向をリサーチしていることがわかる。

一九四三年「教育社会学の問題」は『文化社会学』の中の一つの章である。先行する二つの論文と比べて分量もあり丁寧な記述になっている。「（一）教育社会学の発展、（二）教育社会学の問題、（三）人間と教育」の三節構成で、一節は学説と学者の紹介である。フランス、アメリカ、ドイツ、日本の四カ国の教育社会学を紹介しているが、今まで取り上げていないアメリカと日本の教育社会学の紹介があることが特徴である。アメリカの記述は簡単で短く、ドイツの学者の評を引用し、「実用主義的な傾向」と短くまとめている。また、日本の教育社会学についての学史的記述は管見の限り初めて書かれている。しかし、その内容はスペンサー社会学とドイツの社会的教育学の輸入と外山正一、建部遯吾、木山熊次郎の教育社会学的研究を指摘するだけで、同時代の研究については言及されない。この箇所は蔵内が海外向けに英語で書いたレビュー論文（Kurauchi 1937）の前半部分を翻訳したものであることがわかっている（竹村、一九九八b）。翻訳にあたって、同時代の研究に言及している後半部分をなぜ省略したのかは別の課題として考察が必要である。

文化社会学と題する著書の中に教育社会学の章がふくまれているのは、文化の社会における存在過程において教育が関連するからである。文化の存在過程には二つの方面に問題が分かれる。ひとつは文化が縦に世代より世代へ「かたりつがれ」伝承される過程で、もうひとつは文化が民族から民族へ横に広まり伝播する過程で、前者において社会学的立場から教育の考察があり、後者において文化交流の問題として議論が成立する。「文化社会学の一端としての教育社会学」という位置づけはここで成立している。

一九四八年『文化と教育』は二部構成となっており、教育社会学の内容は「第二部 教育と社会」で述べられる。その中の第一節の「社会学と教育」では、総合的社会学からミュラー・リヤー、分析的社会学の立場からテ

オドール・ガイガー、社会学的教育学としてルヒテンベルク、エルンスト・オットー、スネッデンの学説が丁寧に紹介されている。社会学的教育学は現在でいうところの教育的社会学である。第二節の「社会と教育」では、戦前期に書いた公民教育や職業指導についての論文に修訂を加え、個人が現実的に社会にかかわる側面について論じている。第三節では戦後日本社会における「社会教育」の性格を論じている。学説研究に応用研究を加えているのが特徴である。序文において、蔵内は本書を前書『文化社会学』（一九四三年）のひとつの補正として意味づけている。「文化の新しい世紀を建設する」にあたり、社会学は「現象の冷かな客観的認識を企てる科学」として責任を負っていると述べている。（著作集三：三八五－三八七）

一九四九年／一九五四年「教育と社会」は、全一五巻で構成される講座本『社会学大系』の第一四巻（教育）に書かれた論文である。この『社会学大系』の一九四九年の国立書院版は発刊が確認できていない。論文原稿は一九四九年版で書かれていると推測されるが、実際に刊行されたのは一九五四年石泉社版であると思われる。(9) この論文は体系的な記述が試みられている。「一　教育社会学の発展、二　教育の社会的意義、三　教育の社会形式、四　教育の内容」の四節構成となっている。一は学説紹介であり、前掲の論文と同様に教育思想における「社会の発見」と存在学としての社会学からの教育への接近を説明している。取り上げる学者は前掲と同じくヨーロッパの学者が中心であるが、戦前にはなかったアメリカの教育社会学について述べられている。アメリカにおける教育社会学の制度化を簡単に扱った後、スネッデンを取り上げて「米国の学問、社会学の実用的傾向と実証的調査を重んじる傾向を代表している」とまとめている。またデューイへの言及も見られる。一方でミュラー・リヤーの比重が大幅に減じていることも注目しておきたい。ミュラー・リヤーの教育社会学は社会の発展段階に対応させて教育の発展を三段階に分け論じている教育進化論というべき内容で、綜合社会学の系譜に連なる。個別科学としての社会学を展開させた蔵内社会学が綜合社会学から離脱したことの教育社会学における現れを意味し

ている。

この論稿の特徴は、体系的記述をした二節以下にある。二節では人間素質の可塑性を前提として、人と人との心的影響関係から教育の意義を説いている。三節では人間関係と社会集団を取り上げて、家族、学校とその制度的背景、生徒相互間関係の教育的機能を論じている。最後の四節では教育は社会的に見ると文化の伝達過程であり、その教育内容と社会との関係を扱っている。それは二方向からなり、教育内容が社会からどのように規定されているのかという客観的因果関係の把握を目指す方向と、実践の立場から教育内容をどう選定するのかという方向があるとしている。

一九五三年「教育社会学の領域と課題」（以下「領域と課題」と略）は『講座教育社会学第1巻・近代国家と教育』に掲載された論文であり、蔵内が書いた最後の教育社会学の論文である。後に一九八六年に編まれた『リーディングス 日本の社会学 16 教育』（東京大学出版会）に抄録され、しかも「第1部　教育の社会学――理論と方法」の筆頭論文として掲載されている。リーディングス当該巻の編者柴野昌山（一九八六b）は「第1部　解説」で「蔵内論文（一九五三）は教育社会学のとるべき方法論的立場とその基本的性格を明確に規定するとともに、教育社会学の固有の研究対象を示唆したきわめて意義深いもの」と評価しているが、「当時、これに応えうるすぐれた実証研究はきわめて稀であった」と続け、蔵内理論を高く評価しつつも、戦後の教育社会学のアイデンティティのひとつである実証研究における後続の不在という観点から、その継承を断念しているように読める。

柴野（一九八六a）はその教育社会学史の記述において戦前戦後の学史的断絶を前提として戦前期の蔵内を論じ、他方で戦後に書かれた「領域と課題」を評価している（柴野、一九八六b）。本節での知見では、蔵内においては一九五三年までは教育社会学は継続していたのであり、断絶していなかった。しかし、この後蔵内は教育社会学から離れてしまう。教育社会学会が日本社会学会とは別の学会として制度的に発展し展開するという経緯を

たどり、教育社会学者が教育学部に所属することが多かった一方で、社会学者が文学部社会学科や社会学部に所属することで研究者として別のトラックが成立したという制度的要因もあるが、蔵内の関心が一般社会学へ向かったと考えるのが妥当であろう。

「領域と課題」で参照する学説はフィアカント、デュルケーム、ガイガーなど一九二〇年代、三〇年代に書かれたヨーロッパの社会学者を中心としているが、新たにアメリカの教育社会学者W・B・ブルーコーバーに言及している。実践的性格をもつ「教育的」社会学＝educational sociology が主流だったアメリカの教育社会学において、ブルーコーバーは社会学の理論的枠組による研究という性格をもつ「教育の社会学」＝sociology of education の立場にある。蔵内の立場と相通ずる同時代の研究をレビューしているのがわかる。

ところで、この「領域と課題」が出た一九五三年は蔵内社会学体系の到達点といえる『社会学概論』が出版された年である。前節で述べたように『社会学概論』はこの後『社会学』（一九六二）、同増補版（一九六六）と改訂され、蔵内社会学は独自体系の精緻化へと進む。「領域と課題」の内容を見ると、文化の世代的伝達としての教育は「教育の文化社会学」として、教育的人間関係や集団（家族・学校・職業集団・成人結社など）を対象とする社会学は「教育の集団社会学」となる。蔵内が四つに分けた社会学の領域は理論社会学・集団社会学・文化社会学・歴史社会学であるが、そのうち、ふたつに対応させて、教育社会学を位置づけている。この時点で蔵内は自身の社会学の体系の中に、教育社会学を位置づけたといえる。この位置づけは社会学の領域論についていえることで、蔵内の全体社会論や社会変動論、現象学的方法による社会本質論と蔵内の教育社会学との関係は解明されておらず、課題として残されたままである。

以上、第二次大戦前後で各三つ計六つの論文を概観してきた。まとめると、蔵内の教育社会学は、戦前期の学説紹介の段階から体系的記述に進歩している。その意味で継続的な発展として捉えることができる。また、戦前

はドイツを中心として学説を中心に取り上げているが、戦後はアメリカの教育社会学にも言及するようになり、研究の視野を広げている。蔵内の教育社会学は、蔵内社会学の体系化の過程と一緒に展開した。ただし、蔵内社会学の特徴である東洋思想とその日本的受容としての日本文化思想への顧慮が蔵内の教育社会学に与えている影響は直接的には確認できない。

おわりに

本論文では蔵内数太の生涯において、教育社会学がどのような位置を占めているのかを確認した。辞典の項目等を見ると、蔵内は社会学では教育社会学の創始者・開拓者として評価されている一方で、教育社会学では理論社会学者として評価されていた。このねじれは教育社会学がもつ戦前戦後の間を断絶として捉える学史観（断絶史観）により生じている。蔵内の研究歴を見ると、最初は建部遯吾のもとで綜合社会学を学んだが、一九二〇年代からドイツ社会学の影響を受けて、形式社会学から文化社会学の学説研究を精力的に行った。同時にドイツの教育社会学説の研究を行った。戦前期に法政大学において教育社会学の内容で講義を担当していることも注目されてよい。蔵内の教育社会学研究は東京帝大卒業後の文部省嘱託・私大講師時代から始まり、戦前戦中戦後と継続した。その意味で蔵内の教育社会学に断絶は見られない。ドイツの教育社会学説の紹介から始まり、戦前戦中期において、文化社会学との関係で教育社会学を位置づけた。戦後は自身の社会学の体系化を進め、社会学の領域論の中に教育社会学を位置づけるとともに、アメリカの教育社会学に視野を広げていった。

蔵内の生涯は日本の社会学が綜合社会学から脱して個別科学として確立しようとした展開の過程を体現している。欧米の社会学理論の理解を周到精密に行い、それを自らの学説へ組み込み体系化した。その体系化において

東洋思想に備わっている社会学的思考を適切に位置づけようとした。蔵内は「連続と非連続――日本社会学の回顧と展望」（蔵内、一九七七）において、欧米学説の輸入とその日本社会への適用は、「先進国」モデルに依拠しようとする歴史的パターンが大がかりに反復されているのではないかと疑ってみることを主張する。戦後日本の社会学がその発展にもかかわらず、日本や東洋の現実に根ざした幅広く、深い問題意識に推進されてきたことを意味するものではなかったと指摘する。

教育社会学は戦後新制大学に位置づけられ、学会の形成を経て発展してきた。「変化のはげしい現代にいきながらも、そして、学問の時代的制約ということを考えながらも、理論社会学は長い歴史の間に反復伝えられてきた人間の洞察を軽くあしらってはならない」（蔵内、一九七七：一四一、著作集四：九八）という蔵内の言葉は、理論社会学だけでなく、教育社会学にも問われている。日本の社会学の連続と非連続の中で生きてきた蔵内による言葉は現代においても後学の私たちに問いかけている。蔵内の生涯をたどった現時点において、教育社会学者でもあった蔵内の言葉であるからこそ、批判的な視点で教育社会学史を振り返る視線をもたなければならない。

（1）取り上げる辞典は似たようなタイトルであるため、混同をさけるため、出版年・出版社『辞典名』の順番で表記する。なお大項目辞典である有信堂高文社の『現代社会学辞典』（一九八四：四〇）にもページの欄外注のように二〇〇字に満たない短い記述が「蔵内数太」についてあるが、教育社会学に関連する事項は載っていない。弘文堂『現代社会学辞典』（二〇一二：三七〇）の項目「現象学的社会学」において「リットの社会本質論に立脚しながら、社会の時間的構造へと視野を広げて独自の集団類型論を展開した蔵内数太」との記述がある。しかし、続けて、「今日、この用語（引用者注：現象学的社会学）のもとに語られるのは、…〈中略〉…シュッツの仕事に直接的、間接的に連なっている社会学に限定される」と述べられている。日本における現象学的社会学の歴史において断絶があり、蔵内は継承されていない。

（2）この略伝は竹村（一九九八ａ）の記述をもとに大幅に加筆修正して書かれている。

（3）旭川は岡山市内を貫流する河川であるから、備中江原の興譲館中学校に在籍していたときのエピソードであったとしても、地元の情景として見たことではない。また蔵内が東京帝国大学に進学のため上京したのは一九一七（大正六）年である。

（4）安政五年に描かれた幅四二・五センチ、長さ一七二センチの絵巻物（横田芳水画）「備中江原図」の解説。画は写実的で蔵内の故郷である江原（岡山県井原市の一部）を鳥瞰して克明に描かれており、往時を知る上で貴重な資料である。蔵内は大阪の古書店で出会い、購入した。「あとがき」（蔵内・蔵内 一九八九：六二）。

（5）『第六高等学校一覧』にある第一五回卒業生名簿では、一九一七（大正六）年七月二日卒業の蔵内が属するクラス（第一部丙類）には三六名の卒業生がいる。その進学先は東京帝大法科二一名、京都帝大法科一三名、進学先未記載一名で、蔵内だけが東京帝大文科に進学した。ちなみに法科政治科経済科商科向け英語クラスの第一部甲類の卒業生二九名は東京帝大法科二一名、京都帝大法科六名、東京帝大文科一名、未記載一名であり、文科向け英語クラスの第一部乙類の卒業生二三名は、東京帝大法科二名、京都帝大法科一〇名、東京帝大文科一〇名、京都帝大文科一名であった。（卒業生名簿は累積して掲載されており、本データは『第六高等学校一覧 自大正十四年至大正十五年』を参照した。）

（6）高田保馬への追悼文（著作集五：五一五－五一九）に、蔵内は、学生時代に日本社会学院第六回大会（一九一八年一〇月二七日）において高田先生のお説を直接に聴いて「これから社会学の研究者になろうと思っていた私は」綿密で整然たる論旨に瞠目・驚嘆を禁じえなかったと追想を述べている。前掲の注（5）で示したように、当初から文科大学（文学部）に進学するつもりなら、六高で第一部乙類に所属したはずである。第一部丙類から珍しい文科大学（文学部）進学に特別な意思を推測するのは間違いであろうか。

（7）昭和戦前期の大学における社会学関係講義と担当者は、宮永（二〇〇九）を参照した。

（8）この時期に蔵内と同じく九大思想審議会の示唆によって自発的に退官した法文学部教員に竹岡勝也教授（日本文化史）と田中晃助教授（哲学）がいる。竹岡も斯道文庫の顧問（一九三九年から）および理事（一九四三年一二月から）を務めている。田中も斯道文庫会報に執筆している。山口（二〇〇六：六、二二）によれば、竹岡が一九四八年

四月に公職追放の指定を受けるのは著書によるものであり、斯道文庫理事職等を務めたこととは直接は無関係と述べている。蔵内は公職追放の指定を受けていない。

（9）著作集に収録した際に論文末に初出情報として国立書院一九四九年と石泉社一九五四年を並べて付記している。（著作集三：三〇七）『社会学大系』は日本図書センターから全一五巻が二〇〇七年に復刻されているが、そのカタログによると国立書院版は九巻までで頓挫したとある。

参考文献

蔵内数太著作集編集委員会編（一九七六－一九八四）『蔵内数太著作集』全五巻、刊行：蔵内数太著作集刊行会（代表者 清水盛光）、発行：関西学院大学生活協同組合出版会、第一巻「社会学一般」（一九七八年）、第二巻「文化社会学」（一九七七年）、第三巻「教育社会学」（一九七六年）、第四巻「社会学論文集」（一九七九年）、第五巻「日本文化の社会学」（一九八四年）。

秋山ひさ（一九九〇）「蔵内数太博士の文化の概念と芸術社会学」『社会学評論』四〇（四）、三九七－四一三頁（一六〇号、三九－五五頁）。

麻生誠（一九八六）「教育社会学史」日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社、一七八－一八一頁。

馬場四郎（一九六七）「教育社会学史」日本教育社会学会編『教育社会学辞典』東洋館出版社、二二八－二三三頁。

細谷俊夫（一九三九）「教育的社会学」阿部重孝・城戸幡太郎ほか編『教育学辞典』第一巻、岩波書店、四五一－四五二頁。

喜多野清一編集代表（一九六三）『社会学における理論と実証 蔵内博士退官頌寿記念論文集』培風館。

Kurauchi, Kazuta. (1937) "Educational Sociology" in Japanese Sociological Society. *Sociology : Past and Present in Japan*. Tokyo : Japanese Sociological Society. pp. 39–42.

蔵内数太（一九七七）「連続と非連続―日本社会学の回顧と展望―」『社会学評論』二八（二）、一一〇号、一三八－一四一頁。

蔵内数太（一九八五）「批評に答えて」『現代社会学』一九、一九七－二二〇頁。
蔵内数太・蔵内寿子（一九八九）『備中江原図解説』備中江原図解刊行会。
九州大学創立五十周年記念会編（一九六七）『九州大学五十年史・学術史・下巻』九州大学創立五十周年記念会。
光吉利之（一九九三）「蔵内数太」森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、三三三頁。
宮永孝（二〇〇九）「社会学伝来考―昭和の社会学[5]―」『社会志林』五五（四）、二八六－一三九頁。
森東吾（一九八八）「蔵内理論の出発点」『社会学評論』三九（三）、三五四－三五六頁。
六車進子（一九九一）「蔵内数太の問い」『ソシオロジ』三六（二）、一二七－一三〇頁。
領家穣（一九八五）「蔵内社会学の基底にあるもの―「体験」の意味について―」『現代社会学』一九、一七〇－一九六頁。
柴野昌山（一九八六ａ）「概説 日本の社会学 教育」柴野昌山・麻生誠・池田秀男編『リーディングス 日本の社会学 16 教育』東京大学出版会、三－一四頁。
柴野昌山（一九八六ｂ）「「第1部 教育の社会学―理論と方法 解説」柴野昌山・麻生誠・池田秀男編『『リーディングス 日本の社会学 16 教育』東京大学出版会、一七－二一頁。
新明正道（一九四四）「蔵内数太」新明正道編著『社会学辞典』河出書房、七八六頁。
高坂健次（一九九五）「蔵内数太先生」関西学院大学社会学部三十年史編集委員会編『関西学院大学社会学部三十年史』関西学院大学社会学部、六五七－六六〇頁。
竹村英樹（一九九八ａ）「蔵内数太」川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝―書誌的考察―』勁草書房、四〇二－四一二頁。
竹村英樹（一九九八ｂ）「一九三七年時点における日本の教育社会学―Kazuta Kurauchi "Educational Sociology", 1937. の翻訳と解題―」『年報』（慶應義塾大学教職課程センター）九、四一－五二頁。
富永健一（二〇〇四）『戦後日本の社会学 一つの同時代史』東京大学出版会。
山口輝臣（二〇〇六）「竹岡勝也の肖像（上）」『史淵』一四三、一－二五頁。
YATANI, Yoshikuni.（2009）"On Kazuta Kurauchi's Phenomenological Sociology"『追手門学院大学社会学部紀要』

三、一五九－一六七頁。
米村昭二（一九九〇ａ）「蔵内社会学の展開―人と思想をめぐる一序説―」『社会学評論』四〇（四）、三七五－三九六頁（一六〇号、一七－三八頁）。
米村昭二（一九九〇ｂ）「蔵内社会学における文化交流―理論と応用―」吉備国際大学開学記念論集編集委員会編『国際社会研究の視座』吉備国際大学、一〇九－一二四頁。
米村昭二（一九九一）「蔵内社会学の展開 戦前期―人と思想をめぐる一序説―」『お茶の水大学人文科学紀要』四四、一－一九頁。

蔵内数太（1896 年 8 月 1 日～ 1988 年 7 月 6 日）年図

西暦	年齢	住居	所属	主な出来事
1896 明治 29	0	西江原		⑧1 岡山県後月郡西江原村に父静三郎, 母与志遠の第三子として生まれる
1897 明治 30	1			
1898 明治 31	2			
1899 明治 32	3			
1900 明治 33	4			
1901 明治 34	5			
1902 明治 35	6			
1903 明治 36	7		義之尋常高等小学校	④義之尋常高等小学校尋常科に入学
1904 明治 37	8			
1905 明治 38	9			
1906 明治 39	10			
1907 明治 40	11			
1908 明治 41	12			
1909 明治 42	13			③義之尋常高等小学校尋常科卒業 ④私立興譲館中学校入学
1910 明治 43	14		興譲館中学校	
1911 明治 44	15			
1912 明治 45	16			
1913 大正 2	17			
1914 大正 3	18			③私立興譲館中学校卒業 ⑨第六高等学校大学予科第一部丙類入学
1915 大正 4	19	岡山	六高	
1916 大正 5	20			
1917				⑦第六高等学校大学予科第一部丙類修了

◯内の数字は月、続く数字は日。『　』は著書、「　」は論文で、家族関係事項とともに右端に記載。

「中学の頃みた、旭川沿いの料亭から嘲笑をこめて投下される残飯を川原で必死に拾い口にしていた一家族」が「社会学を志させた」（六車 1991）

大正 6	21	東京	東京帝国大学	⑨東京帝国大学文科大学哲学科（社会学専修）入学
1918 大正 7	22			
1919 大正 8	23			
1920 大正 9	24			⑦東京帝国大学文学部社会学科卒業（卒論「社会衰頽の原因考察」） ⑧文部省勤務(普通教育及通俗教育調査の事務嘱託)大学院在籍(～23年⑦)
1921 大正 10	25		大学院・文部省	④日大高等師範部講師（英語）(～23年⑧) ⑫「人口減衰と社会の衰頽」→著1
1922 大正 11	26			大学院研究テーマ「社会問題と国運の関係」 ⑩「階級統制に就いての考察」
1923 大正 12	27		文部省嘱託・私大講師	⑦「支配と労働」→著1
1924 大正 13	28			⑦「東京社会学研究会」発会に参加　⑦「レオポルド・威力の本質」 ⑨実践女学校高等女学部専攻科講師(～26年①)　⑪「独乙及び仏蘭西師範教育制度」
1925 大正 14	29			⑩青山学院高等学部講師（社会学：～32年③）
1926 大正 15	30			①「教育に関する社会学的問題」→著3 ⑫「社会学と教育」『社会学』（綿貫と共著）→著3
1927 昭和 2	31			⑩「社会学と教育」『教育的社会学』（改題再版；綿貫と共著）
1928 昭和 3	32			⑤三浦達夫長女寿子と結婚 ⑪東京高等商船学校講師（修身：～1933年④依願退職）
1929 昭和 4	33			④聖心女学院講師（教育学：～30年⑦）
1930 昭和 5	34			⑥「教育の基礎としての日本民族性の認識」→著3
1931 昭和 6	35			④日本大学講師（社会学：～33年⑩）　④「公民教育及び社会教育について」『季刊社会学』1
1932 昭和 7	36			⑤文部省 公民教育に関する事務を嘱託す
1933 昭和 8	37			⑪14 文部省依願事務嘱託を解く　③「教育と社会学」『教育』18
1934 昭和 9	38	福岡	九州帝国大学助教授	⑪14 九州帝国大学助教授（法文学部社会学講座担任）　④「現象学的社会学」
1935 昭和 10	39			
1936 昭和 11	40			⑦「個人と社会 ― ジンメルよりリットへ」
1937 昭和 12	41		九州帝国大学教授	⑪九州帝国大学教授（法文学部社会学講座担任） ②文部省視学委員嘱託　②～③視察公民科（福岡県）
1938 昭和 13	42			“Educational Sociology”
1939 昭和 14	43			⑧「随筆 連句管見」九大新聞185
1940				①6 斯道文庫相談役

昭和 15	44	福岡	九州帝国大学教授	⑧5 斯道文庫夏期講座講師「東洋の社会観」
1941				③1 斯道文庫顧問　③「国土」『九大哲学年報』2
昭和 16	45			日本社会学会九大法文学部開催
1942				①福岡県下における宮座の調査研究（斯道文庫調査費支出）
昭和 17	46			①「論語と社会学」→著 4
1943				③『文化社会学』→著 2
昭和 18	47			⑩日本社会学会第 18 回大会公開講演「文化の東洋的観念」
1944				⑥27 斯道文庫理事（～ 45 年⑫）
昭和 19	48			⑫「日本社会学の系譜」『日本諸学』5
1945				③日本諸学振興委員会昭和 20 年度哲学部専門委員嘱託（文部省）
昭和 20	49			⑫20 斯道文庫理事辞任
1946				③九州帝国大学教授依願免官
昭和 21	50			波騒ぐ浦に 一羽の鷗飛ぶ
1947				わが物思ひの影のごと飛ぶ　47 年晩秋　⑤29 父静三郎死亡
昭和 22	51			⑩文学博士（東京大学）「文化社会学」
1948				③『文化と教育』→著 3
昭和 23	52	大阪	大阪大学教授	⑪大阪大学教授（法文学部社会学講座担任）
1949				
昭和 24	53			
1950				①「社会変化と教育」『教育と社会』→著 3
昭和 25	54			⑩日本社会学会理事（～ 1960 ⑩）⑪日本教育社会学会理事（～ 1969 ⑩）
1951				
昭和 26	55			
1952				
昭和 27	56			⑪適塾記念会発足会に参加
1953				⑤「教育社会学の領域と課題」→著 3 ⑥『社会学概論』培風館
昭和 28	57			⑧第 2 回国際社会学会議出席（リエージュ）
1954				④大阪大学文学部長（～ 1956 ③）③「教育と社会」『社会学大系・教育』→著 3
昭和 29	58			
1955				
昭和 30	59			
1956				⑤関西社会学会代表（のち委員長）（～ 59 年⑤）
昭和 31	60			
1957				
昭和 32	61			⑩30 母与志遠死亡
1958				
昭和 33	62			⑩日本社会学会会長（～ 1960 ⑩）
1959				
昭和 34	63			
1960				④大阪大学教授定年退職　④名誉教授
昭和 35	64		関西学院大学教授	④関西学院大学教授
1961				⑤関西社会学会顧問
昭和 36	65			
1962				
昭和 37	66			⑤『社会学』培風館
1963				

昭和 38	67		関西学院大学教授	
1964 昭和 39	68			⑩「資料 中村耕雲事蹟」(碑除幕式資料) →著 5
1965 昭和 40	69			
1966 昭和 41	70			④『社会学増補版』培風館→著 1 ⑤関西社会学会 17 回大会特別講演「理勢乗除」
1967 昭和 42	71			③関西学院大学教授退職
1968 昭和 43	72		追手門学院大学教授	④追手門学院大学教授
1969 昭和 44	73			
1970 昭和 45	74			
1971 昭和 46	75			③「法則・運命、規範・潮流」→著 4 ⑦「熊沢蕃山について」→著 4
1972 昭和 47	76			
1973 昭和 48	77	大		③追手門学院大学教授退職
1974 昭和 49	78			⑥「人間・社会・宗教」→著 2
1975 昭和 50	79			⑩ 6「熊沢蕃山と大和郡山」(建碑式講演) →著 5
1976 昭和 51	80	阪		⑩『著作集』(３巻教育社会学)
1977 昭和 52	81			⑩「連続と非連続―日本社会学の回顧と展望」→著 4 ⑧『著作集』(２巻文化社会学) ⑫「雪舟と備中重源寺」→著 4
1978 昭和 53	82			④『著作集』(１巻社会学一般) ⑦「現象学的社会学」→著 4
1979 昭和 54	83			⑦「デモクラシーと儒教的伝統」(関学セミナー講演) →著 5 ⑩『著作集』(４巻社会学論文集)
1980 昭和 55	84			③「正倉院八卦背鏡私考」→著 5
1981 昭和 56	85			
1982 昭和 57	86			①「社会学の視野について」→著 5 ⑫「中山美伎の思想」『天理』6 →著 5
1983 昭和 58	87			②「緒方洪庵と適適塾」『適塾』16 →著 5
1984 昭和 59	88			③『著作集』(５巻日本文化の社会学)
1985 昭和 60	89			⑪ 24 妻寿子死去
1986				殊更にうまきもの無し　殊更に まづきもまた無し　妻逝きて生く　　86 年 7 月

昭和 61	90			
1987 昭和 62	91			
1988 昭和 63				⑦ 6　大阪豊中の自宅にて死去（享年 91 歳）
1989 平成元				⑦『備中江原図解説』（蔵内寿子と共著）
1990 平成 2				③『社会学評論』特集蔵内理論

注：本年図は「蔵内数太博士略歴」（喜多野編 1963：329–332）および竹村（1998a：402–412）をもとに『蔵内数太著作集』全 5 巻（1976–1984）から補訂して筆者が作成した。著作集に収録を「→著 数字」で示した。書誌情報は竹村（1998a）を参照されたい。

なお、蔵内の理事履歴について日本教育社会学会にご協力を得た。付して感謝する。